

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 讃岐遍路道 屋島寺道を歩く

講師 渡邊 誠（高松市文化財専門員）

平成28年4月17日（日）

共催 高松市歴史民俗協会  
高松市文化財保護協会  
高松市教育委員会

## はじめに

讚岐遍路道 屋島寺道（表参道）は、現在、県道14号線（屋島公園線）となっております。石畳とその周囲の木々が織りなす雰囲気は訪れるたびに様々な印象を与えてくれます。現在は、お遍路さんよりも、地元の方々が身近なリフレッシュ空間として多数利用されているようです。

また、今年三月十九日からは屋嶋城跡城内へと続く見学路も整備し、山上へのアクセスの選択肢が増えています。この見学路は登城路を意識したものであり、立地、指定地等の諸条件から健脚者向けのコースとなっております。

本日は、遍路道から屋嶋城跡の城門を抜け、屋島寺へと向かいます。新緑を感じながら春の遍路道、遊歩道を歩いてみましょう。



## 1 加持水（かじすい）

金毘羅参詣名所図会によれば、弘法大師が、仏天を供養し誦呪加寺（呪文を読み仏の加護保持を祈とうすること）をした際に用いられたといわれる水です。

干ばつで各地の池や井戸水が枯れても、この湧水は絶えることがないようです。また、路傍の石碑に字が刻まれています。弘法大師の筆跡と伝えられています。（加持水説明板より）



## 2 不喰梨（くわずのなし）

空海（弘法大師）が屋島に登ったとき、梨がおおいしそうに熟していたので一つ所望をなさいました。しかし、持ち主は「うまそうにみえてもこれは食べられない不喰梨です」と、嘘を言うことになりました。

その後、持ち主はこの梨を採って市に売りに行きましたが、味の無い梨になっていました。空海に梨を与えなかったことを後悔したと言われています。人々は不喰の梨と言って、慈悲の心の大切さを伝える場所として知られています。

不喰梨にあるお地藏さんには、いく



つか元号が刻まれています。その中には明和八年のものがあり、一七七一年（十八世紀の第4四半期）に建立されたことが分かります。加持水のお地藏さんと似ている箇所もあり、同じころ建立されたのかもしれませんが。

### 3 畳石（たたみいし）

讃岐岩質安山岩の水平方向に発達した板状節理の露頭で、屋島寺へ至る遍路道沿い見られます。板状の岩が層になっており、畳を重ねたようになっていきます。西行法師の作と伝わる歌碑「宿りしてここに仮寝の畳石 月はこよひの主なりけり」があります。

### 4 屋嶋城跡城門（やしまのきあと じょうもん）

屋嶋城は、『日本書紀』にその名が記されており、古くから屋島に城が築かれたことは周知の事実とされてきましたが、その実態は長らく謎に包まれてきました。大正六年、東京帝国大学の関野貞氏によって初めて学術的検討（踏査）がなされ、抱谷式として城域が示されました。その後、昭和六十年には、当時奈良女子大学の村田修三氏によって南嶺山上部に残存する幅二メートル程の平坦地が屋嶋城の一部である可能性が指摘されました。そ

の後、それらが屋嶋城の明確な遺構であることを証明することができず、幻の城と言われるような時期が長く続くこととなります。そのような中、平成十年一月に平岡岩夫氏によって石積み遺構の一部が発見され、その発見を契機に、高松市教育委員会が発掘調査を開始しました。そして、十四年に城門遺構が発見され、屋嶋城が実在したことが証明されました。



六六三年の白村江の敗戦を受け、中大兄皇子が築かせた屋嶋城は『日本書紀』にその名が記され、先の立地からも国防における重要拠点だったと考えられます。急峻な崖は、眺望の利く見張り場としてだけでなく、天然の要害として利用でき、人工的に築かれた城壁はわずかで、このことは山上や尾根に城壁を廻らす他の古代山城と大きく異なる点であり、屋島ならではと言えます。

屋島は北嶺と南嶺の二つの山から構成されており、現在、その全域を山城の範囲と想定していますが、北嶺と南嶺は非常に細い尾根でつながっており、城壁を想定しづらいこと、北嶺では遺構が未確認であること、南嶺の最北部に堀切状遺構が二条平行して認められることから、山頂の外郭線は南嶺のみに廻っていた可能性も想定されます。ただし、瀬戸内海の防備という点では北嶺の方が、眺望が利く立地にあり、城壁及び施設の有無という課題はあるものの、山城としての機能は担っていたと考えられます。城壁は、南嶺の北斜面と南西斜面の標高二七〇メートル付近に認められます。

城内部の施設としては建物遺構が想定されますが、今のところ見つかっていません。ただし、屋島寺宝物館建設時の調査で、七世紀中頃から八世紀初頭頃の須恵器が出土しています。このほか、「血の池」を含め、貯水池と想定される集水場所が山頂に数か所あります。水門は明確な遺構は残っていませんが、地形などから南水門と北水門の二箇所が想定され

ます。いずれにしても城内の調査は今後の大きな課題です。

城門地区は、現状で唯一、城門遺構が確認されている箇所です。他の地区に比べ、遺構が残っていると、最も調査が進み、屋嶋城跡を象徴する場所でもあります。

城門遺構は懸門構造けんもんこうぞう（※1）で、高さ二・

五メートル以上の段差を設けています。門道部分は、幅五・四メートル、奥行き約一〇メートルを測り、国内最大級の規模を誇ります。床面は大部分が流失し、城門に関わる柱穴は両側二基の計四基だけ確認できました。いずれも城内側に偏っていて、もともとは城外側にも柱穴があったと考えられます。柱痕跡が確認できたものから想定すると幅三〇〜四〇センチメートル程度の角材であったと考



えられます。門道には地山に掘り込んで設置した暗渠構造の石組みの排水溝があります。

城門遺構の奥には、高さ五メートルの岩盤が迫りたち、城門を突破した敵の侵入を阻む構造となつています。これは「甕城」おうじょう（※2）と呼ばれる岩盤を利用した枡形状の施設で延長約十九メートル、幅約八メートルほどの空間を造り出し、その最高所に小規模な石積みを半円状に廻らし、区画しています。先の懸門構造と甕城は朝鮮半島にルーツがあり、日本の古代山城を考える上で非常に貴重な遺構です。この甕城を抜けると、北東方向に小規模な谷地形があることから、通路として利用されていたと考えられます。

城門の左右に展開する城壁は夾築きょうちく（半夾築はんきょうちく）構造こうぞう（※3）で、いずれの面も山頂で産出する安山岩の野面石を用いた乱積みの石積みで、内





部は盛土で、三層構造であることが分かっています。いずれの層も現地土や石材を用いて層状に盛り上げています。

石積みは傾斜する斜面に地山である岩盤を取り囲みながら構築されており、一部は岩盤の影響で石積みが孕んだように突出する箇所もあり、城壁は根石部分で

折れを呈しますが、基本的には曲面で仕上げています。城壁の前面の大部分は崩落していましたが、背面側の石積みなどから往時の城壁の高さを推定することができ、城門北側で七・三〇メートル、城門南側で六・七メートルを測り、非常に大規模な城壁であったことが分かります。

【用語解説】

(※1) 懸門構造 (けんもんこうぞう)

城門の入口に段差を設けて、敵の侵入を阻む構造の城門。平時は梯子や縄梯子などを設置して出入りし、敵が攻めてくると、梯子をはずして侵入を阻みます。なお段差のない門は平門と言います。

(※2) 甕城 (おうじょう)

城門の外側や内側に、城門を取り囲むように円弧状の城壁を設けて、敵の侵入を制限するとともに、敵への攻撃を行うための施設です。近世の城によく見られる虎口 (こぐち) や枡形 (ますがた) に似たものです。屋嶋城の場合は、城門の内側に設けられていて、岩盤を利用し、その上部に小規模な石積みをつけています。

(※3) 夾築 (半夾築) 構造 (きょうちく (はんきょうちく) こうぞう)

城壁の両側が壁となっているものをいいます。また、古代山城の城壁には、斜面にもたせ掛けるような構造で城外側にしか壁がないものを内托 (ないたく) と呼びます。



城壁の形状

## 【修復事業】

発掘調査は、屋嶋城が実在したことを証明し、城門遺構及び城壁に関する多くの知見をもたらしましたが、同時に姿を現した石積みは著しく傷み、崩落の危機にあることも明らかになりました。既述のとおり、城門遺構は屋嶋城とその発見において象徴的な場所でもあることから、その歴史を伝えるために、遺構の保存と活用を目的として、平成十九年度から整備事業を開始しました。

城内遺構を含む城壁の修復作業は、史跡高松城跡で培われた石垣解体修理に習いながら、表面観察から解体範囲を決めた後、番付を行い、盛土の撤去、石材の撤去という作業を繰り返し実施していきました。これらの作業を通じて城壁の構造や本来の形状について重要な成果を得ることができ、往時の姿を描けるようになりました。その一方で、修復作業を行なう上で、多くの課題も明らかになりました。

城壁は高さで急勾配に加え、近世の石積みとは異なり、構造的に脆弱であること、現地土が施工において非常に扱いづらい土であること、現地には多くの水みちが存在することなど土木／地盤工学的観点からいくつもの問題点が指摘されたのです。そのため、解体後、すぐに積直しを実施する計画を変更し、修復方法を検討することとなりました。屋嶋城跡調査整備会議の意見をいただきながら、高さ二メートルのミニチュア版城壁の試験的

な施工、その経過観測の実施、施工方法の検討、調査成果や土質試験などにもとづく分析（シミュレーション（FEM解析）等）を実施しました。その結果、想定される構造や工法で修復を行った場合、自重で変形・崩落することが明らかとなり、何らかの補強が必要となりました。そのため、遺構部分への影響を最小限にし、リバーシブル（代替可能）という考え方にに基づき、城壁の安定性を確保するため、排水補強パイプの打設と酸化マグネシウムによる土の強化を行うこととなったのです。

平成二十三年度から城門遺構を含む城壁の修復工事を開始し、城門遺構を挟んで南側、北側の順序で修復を行っていきましました。一三五〇年前という長い年月を経た石積みの修理と崩落部分の復元は、想像以上に困難で、日々、試行錯誤の連続でした。二十年度の転石の回収からはじまった工事は、八年の歳月をかけて終



了し、二十七年六月に往時の姿が甦ったのです。その後、城門遺構周辺の環境整備工事を実施し、二十八年三月十九日に一般公開となりました。

## 5 屋島村道路元標（やしまむらどうろげんぴよう）

屋島寺への遍路道を登り切った左側にあります。道路法（大正8年）制定後の道路法施行令（同年11月）に道路元標の設置、各市町村に1個置くことを規定し、それに基づく内務省令により、石材そのほか耐久材の材料等を定めています。

## 6 屋島寺（やしまじ）

四国霊場八十四番札所で、山号は南面山です。

『屋嶋寺龍巖勸進帳』などの史料によれば、開基は鑑真和上で、天平勝宝六年（七五四）唐から来朝した際に都へ

の途中で屋島に寄って、北嶺に堂宇（普賢堂）を建立し、普賢菩薩を安置したとされています。その後、その弟子空鉢恵雲くわはつえん律師が僧坊を構え、初代の住持となって仏教を広めたと



『唐招提寺千歳録』が伝えていきます。その後、弘仁年間には、弘法大師が自ら千手観音像を作り、南嶺に寺院を移したと言われています。

これまでの発掘調査によって、屋島北嶺の千間堂跡という地名が残る場所の南で仏堂跡（礎石建物）が確認されています。基壇からは多口瓶と呼ばれる仏具と考えられる特殊な壺が3個体出土しています。この建物が建立される前、九世紀頃から僧侶の修行場所として利用され、十世紀頃には礎石建物等の整備がなされ、十二世紀頃まで機能していたと考えられます。御本尊で重要文化財の千手観音坐像は十世紀の作とされ、この北嶺での歴史を伝えるものと考えられます。

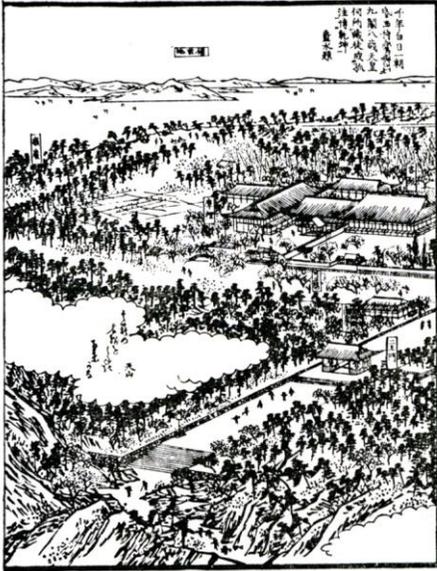
一方、南嶺での調査では、讃岐国分寺と同文の軒平瓦、綾歌郡綾川町の陶（十瓶山）瓦



窯跡群の西ノ浦支群で焼成された可能性のある軒丸瓦・平瓦などが多数出土しており、平安時代後期（十一世紀後葉）から末頃に南嶺に寺院が整備されたと考えられます。また、それ以前の平瓦等も含まれており、北嶺からの寺院の移動時期も含め、千間堂跡との関係が注目されます。

重要文化財である本堂、貞応二年（一二二二）の銘のある銅鐘、連珠文軒平瓦等から、再度、鎌倉時代に寺院が整備されます。その後の詳細はわかりませんが、明徳二年（一三九一）の『大和國西大寺諸國末寺帳』、永享八年（一四三六）の『大和國西大寺坊々寄宿諸末寺帳』には「屋嶋普賢寺」という記載があり、国分寺等とともにその頃は、大和西大寺の末寺になっていて、本堂北側の調査では十四〜十五世紀前葉頃の遺物が出土しています。

江戸時代初期には、龍巖上人によって勧進が行われ、大規模な再建事業が実施されています。『生駒一正寄進状』によれば、慶長十五年（一六一〇）、住持龍巖上人が時の藩主生駒一正に寺院の再興のため、本堂等の再建事業を願ひ出て許可を得ています。しかし、一正の逝去により中断し、その後、次の藩主正俊の援助を受け、勧進帳を携え、讃岐高松はもとより、慶長一六〜一八年にかけて江戸・京都等で勧進を行い、元和九年（一六二三）まで続けています。御本尊千手観音坐像光背裏墨書、建築部材に記された墨書等から本堂の修理工事は元和四年（一六一八）に実施されたようです。屋島寺に伝わる「源平屋島檀浦



『讃岐国名所図会』にみる屋島寺（高松市歴史資料館所蔵）

合戦縁起」の奥書には慶長十七年（一六一二）と記されており、双幅で伝わる「屋島寺縁起絵」とともにこの一連の再建事業の中で製作されたものと考えられています。

その後、本堂は万治元年（一六五八）、元禄二年（一六八九）、享保元年（一七一六）、安政六年（一八五九）から万延元年（一八六〇）、明治三十九年（一九〇六）、昭和三十二年から三十四年に大小様々な修理を経て、現在に至っています。

本堂の他の寺院を構成する堂宇は、棟札や寺伝などから、仁王門が万治元年（一六五八）以前、千体堂が万治四年、四天门及び三体堂は十八世紀中頃、十九世紀以前に御成門、鐘楼が十九世紀中頃に建立されているようで、江戸時代を通じ、藩主であつ

た生駒氏、松平氏等の庇護を受けながら整備されました。仁王門、四天門、千体堂など多くの堂宇が境内地に現存しており、十九世紀中頃に描かれた『讃岐国名所図会』や『金毘羅参詣名所図会』との比較からも現在の寺観がほぼ江戸時代に整えられていたことが分かります。

《参考文献》

香川県一九五九『重要文化財屋島寺本堂修理工事報告書』

香川県一九七二『香川叢書』第一巻

香川県教育委員会一九八一『香川県の近世社寺建築』

榊角川書店一九八一『日本名所図絵』十四 四国の巻

渋谷啓一二〇一〇 a 『屋島の歴史的立地』『屋島風土記』

渋谷啓一二〇一四 『屋島寺縁起絵』『空海の足音 四国へんろ展』香川編

香川県立ミュージアム

高松市教育委員会二〇〇三『史跡天然記念物屋島』

高松市教育委員会二〇〇七『屋島寺』

高松市教育委員会二〇〇八『屋嶋城跡』二

高松市・高松市教育委員会二〇一三『屋嶋城が築かれた時代』

高松市・高松市教育委員会二〇一四『史跡天然記念物屋島指定80周年記念企画展

屋島・シンボリックな大地に刻まれた歴史』

田辺三郎助編一九八五『四国の仏像』日本の美術No.226 至文堂

渡部明夫二〇一〇『屋島寺の創建』『屋島風土記』

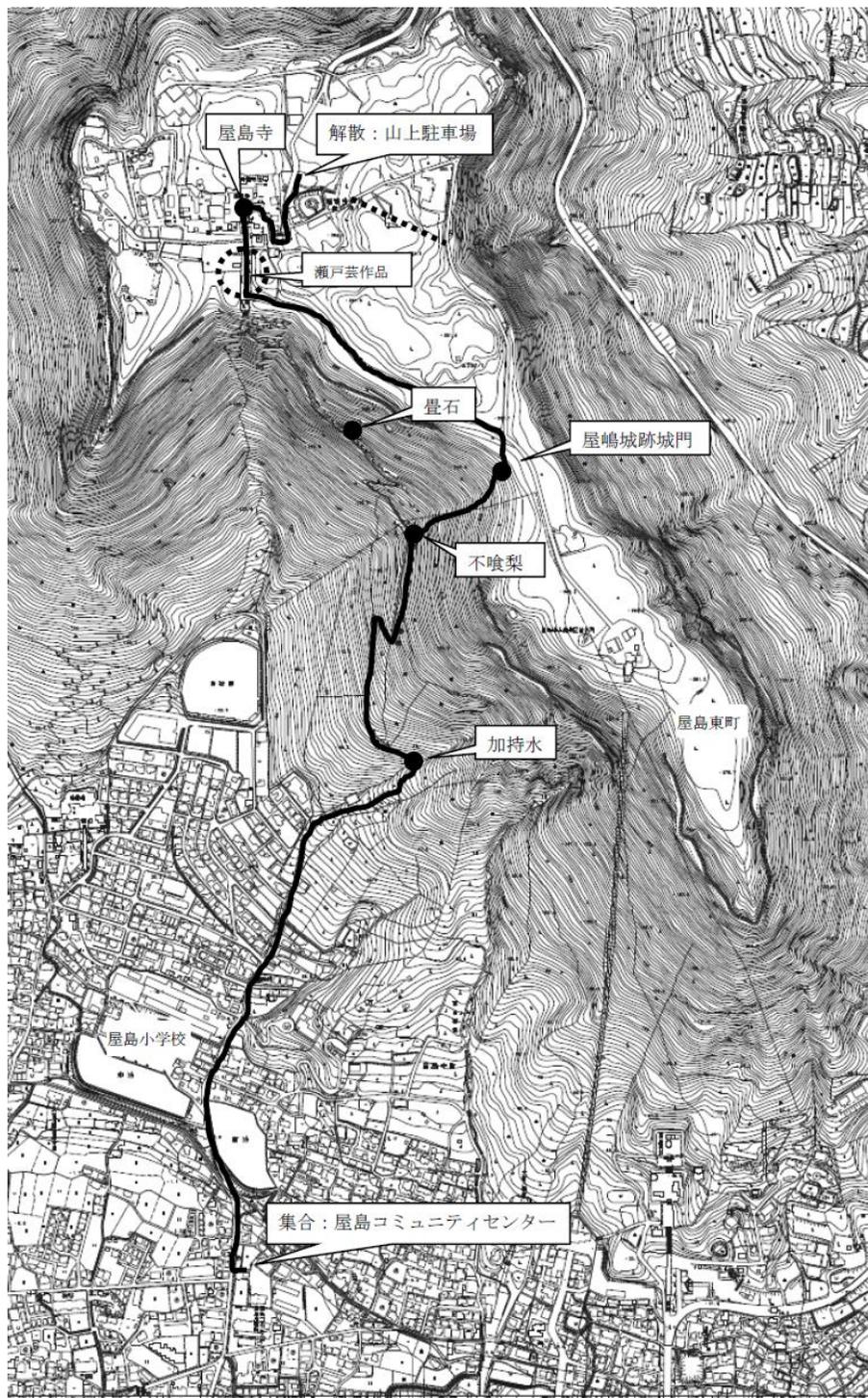
渡邊誠二〇一二 「正体が見え始めてきた「古代山城」屋嶋城の謎」

『香川県謎解き散歩』新人物往来社

渡邊誠二〇一六 a 「甦る屋嶋城」『元氣やしまの風』No.12

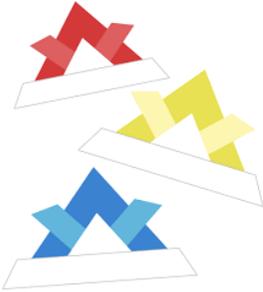
渡邊誠二〇一六 b 「屋嶋城」瀬戸内・屋島の新たな魅力」城門と城壁の修復」

『月刊文化財』六三一号 古代山城の世界 文化庁



4月17日（日）屋島山上駐車場からの復路

◆屋島山上シャトルバス ◆ことでん志度線上り  
（屋島山上） （琴電屋島） （瓦町）  
12:05 発 → 12:13 着 12:21 発 → 12:35 着



### 次回のふるさと探訪は…

テーマ 引田の町並みを歩く（予定）  
と き 平成28年5月22日（日）  
9:30～12:00頃  
集合場所 東かがわ市役所引田庁舎  
（行事用の駐車場はありません）

講師 引田まち並み保存会

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」5月15日号に開催案内を掲載しますので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、  
文化財課（TEL839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）で  
お知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

---

### ★次回の交通案内★

◆JR 高徳線

（高松駅） 7:17 → （引田駅） 8:36

>>>JR 引田駅から徒歩4分 → 東かがわ市役所引田庁舎

## 「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※参加中は、次のことに充分留意し、  
意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。  
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、  
道路の端を一直線で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。